南無南無坊主達の潜む屋敷の奥へと進むと一人の女が現れた。
「ハ～イ、お久しぶりね。アフロサムライ。って、言っても知ってるのはあなたが殺したバカな姉のほうだったかしら」
肌はほとんどを露出しており、豊満な肉体が色香を放つ。
美しい髪、冷徹な眼差し、そして見覚えのあるかんざし。
女は軽い口調で以前に彼に殺された女忍者の妹であることを告げた。

「どう？殺される前に私と遊ばない？あなた、お菊って女を抱いたようだけど、
あんな田舎くさい女なんかじゃ物足りなかったでしょう？しかも、裏切って南無南無坊主に
殺されたってバカみたいな最期で笑えるわ。
自慢じゃないけど、私のコレに挟まれた男はみんな一瞬でイッちゃうの」
女はケラケラと笑いながら、これ見よがしに己の胸を寄せる。

「痛みも感じずに殺してあげるんだから、私って優しいでしょう。うふふふふ。
さあ、いっぱい、楽しみましょう」
冷徹なまなざしで、幾多もの男を虜にし、幾多もの男のモノを咥えてきたであろう唇が
艶かしく彼を誘う。

四半刻後、部屋には女の喘ぎ声が響き渡っていた。
彼を陥れるはずが女忍者は逆に幾度もその豊満な肉体を犯され、身体の自由を奪われていた。
彼のモノが激しく突き入れらる度に大きな乳房が激しく揺れ、先ほどまでの口調とは一変した恐怖の混じった声を上げる。
「や・・・い・・・ぁ。は・・・激しすぎ・・・るぅ・・・あっ。あんっ！」

アフロの手は止まらなかった。
自身を救ってもらい、また敵同士でありながらも愛という感情をくれたお菊。
そんな彼女の死を嘲笑ったこの女忍者に彼は心の底より怒りが溢れ出していた。
「どうした？まだ半分も終わっていないというのに、もう限界か？・・・悪いがそろそろ最後を出させてもらうぞ」

「――――！？う、うそっ。もうやめ・・・」
女忍者の言葉も空しく、勢いよく大量の精液が彼女の中へと注がれる。

「い、いやあああああああああっあっ！」
悲鳴が響き渡る。
「ゆ、ゆるざ・・・ない・・・絶対・・・ゆるさ・・・ない！こんなこと・・・こん・・」
「黙れ、外道」
涙ぐみ、しかし憎悪に駆られた女忍者に、アフロサムライは冷徹に言い放った。

その瞬間、彼女の大きな胸を一筋の線が横に走ると、そこから彼女の身体に切れ目が広がっていく。
「な、なに？なんで…私の身体…いや…いや…」
徐々にずれていく己の身体に、くノ一は驚愕の表情で己に起きている異常に困惑する。
「貴様ごときお菊を笑う資格などない。これまで以上の恐怖を味わいながら逝けっ」

「いやっ。いやっ。死にたくない…死にたくなひっ…たすけて…たすけ」
「手遅れだ。死ね」

「――――!?」

涙ぐむ女忍者の顔を一筋の線が走ると同時に血が滴り落ち、

次の瞬間に彼女の顔がズレ落ちた。

「ふむ、やはりこやつでは役不足であったか」
アフロサムライが去ってすぐ、部屋に南無南無坊主が現れた。
そこには変わり果てた女忍者の亡骸。

胸部分で切断された亡骸には
刀が深く突き刺され、女の秘部を
突き抜けた部分から大量の精液と
彼女の血が勢いよく溢れ出ている。
切断されたにも関わらず中身を晒した
二つの乳房は激しく揺れ、亡骸は未だ
生にしがみついているかの様に
ビクンビクンと揺れ動く。
そしてすぐ側には胸から上を、顔を切断
され、中身を晒した女のもう一つの亡骸
が転がっている。
同様に未だ身体全体が激しく痙攣し、
切断された胸が揺れ動く。
「あのジャスティスを倒した凄まじい剣技。この切断面から見てこやつは斬られたことに気づかぬうちに死んだであろうな。意識は既にないものの、身体がまだ生に執着しておるわい。
…それにしても」

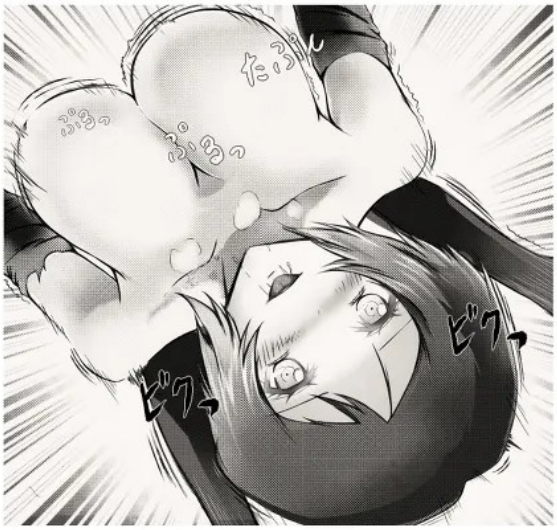
「生意気な女だったが、噂以上の感触じゃ。射れただけで溢れ出しおったわ。
前々から一度犯してみたかったが、こやつめはわしらに対して反抗的であったからのぉ」
削げ落とされた顔は南無南無坊主に拾い上げられ、その艶かしかった口に大きなイチモツがねじ込まれていた。
その表情は苦痛に歪み、目は大きく見開かれ、それが己の死に顔となろうとは彼女自身、知る術もなかったであろう。

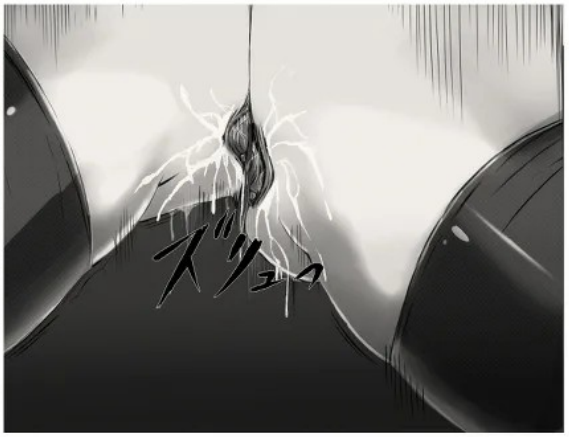
「だが、もう拒むことも出来ぬ。惜しむべきは生きた状態で楽しみたかったが、まあよい。身体のほうもあとで存分に楽しむとして、貴様は今後はワシらの性処理玩具として扱わせてもらうぞい。ヒャッヒャッヒャッヒャッ」
バラバラになったクノ一の亡骸、そして血に染まった部屋に、狂気に満ちた南無南無坊主の笑い声が響き渡る。

あっ
いや
あっ
ズっ

ぶちゅん
どぴゅ
ぶちゅ
ビクっ
ビクっ

ズズっ

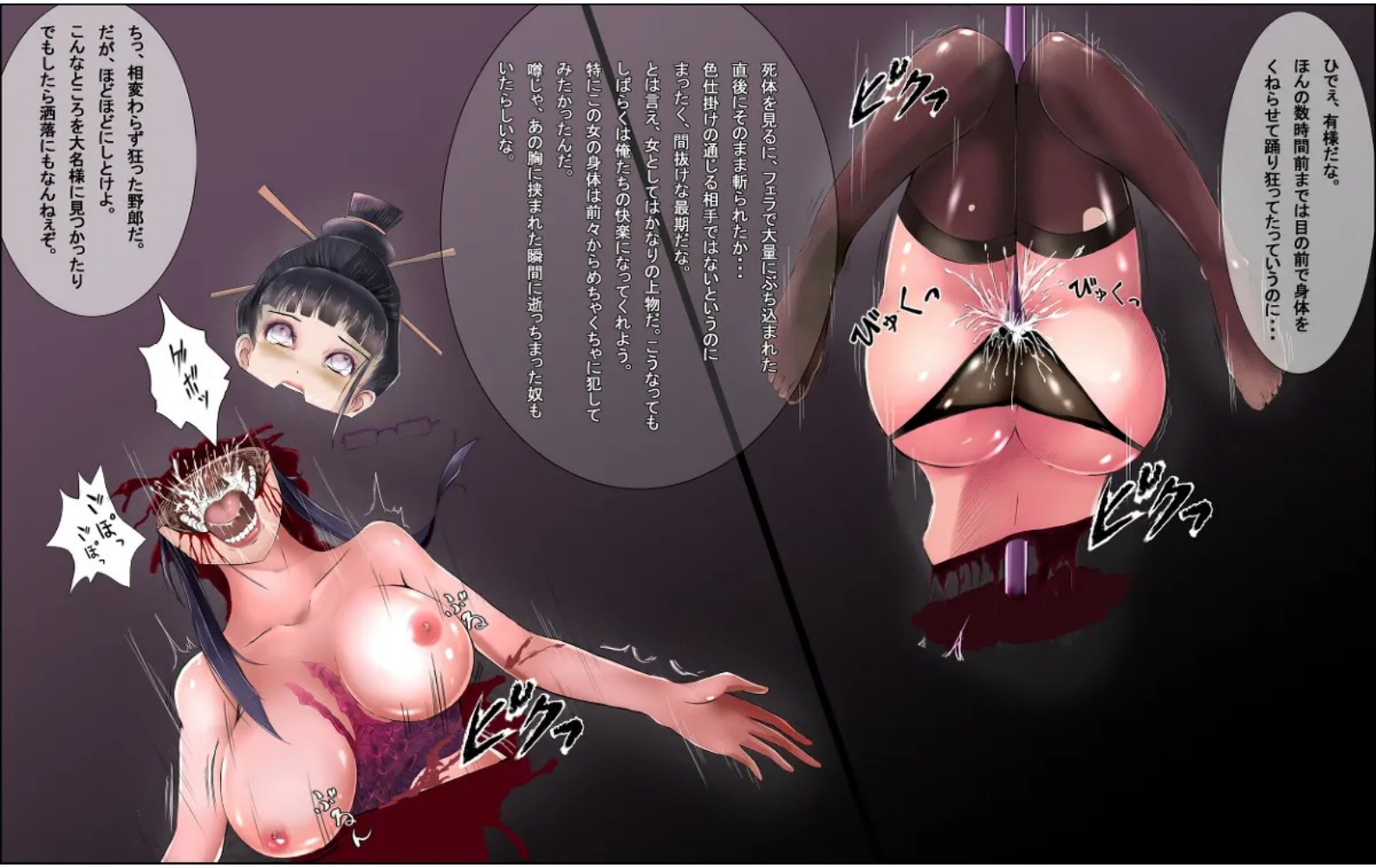




Thank you!

「どうしたの？」
「かかってらっしゃい♥」

いやっ、いやぁああ！！
助けて！助けて！
まだ死にたくな――
女とはいえ、悪徳大名に加担した
貴様らを生かしてはおかん。
己の醜い中身を晒しながら逝け


ひでぇ、有様だな。
ほんの数時間前までは目の前で身体をくねらせて踊り狂ってたっていうのに…
ビクッ
びゅくっ
びゅくっ
ビクッ
死体を見るに、フェラで大量にぶち込まれた直後にそのまま斬られたか…
色仕掛けの通じる相手ではないというのにまったく、間抜けな最期だな。
とは言え、女としてはかなりの上物だ。こうなってもしばらくは俺たちの快楽になってくれよう。
特にこの女の身体は前々からめちゃくちゃに犯してみたかったんだ。
噂じゃ、あの胸に挟まれた瞬間に逝っちまった奴もいたらしいな。
ちっ、相変わらず狂った野郎だ。
だが、ほどほどにしとけよ。
こんなところを大名様に見つかったりでもしたら洒落にもなんねぇぞ。
ゲボッ
ゴぽっ
ゴぽっ
ぶる
ぶる
ビクッ

ナンバー2のハチマキを
手に入れたアフロサムライ。
しかし、その代償は大きすぎた。
道中、重傷を負った彼はお菊と
いう女性に助けられる。
彼女の必死の介抱のおかげで
彼は命を救われ、やがて二人の
間には恋が芽生え始めていた。
しかし、お菊は南無南無坊主が
仕向けたくノ一であり、そして
昔死んだと思われたおつるの
成長した姿であった。
お菊は南無南無坊主を裏切り、
アフロと共に逃げようとするが
殺されてしまう。
アフロは再び深い悲しみに
捉えられながらも、
ジャスティスの居場所を知り、
お菊の仇でもある南無南無坊主
を追って旅をしていた。

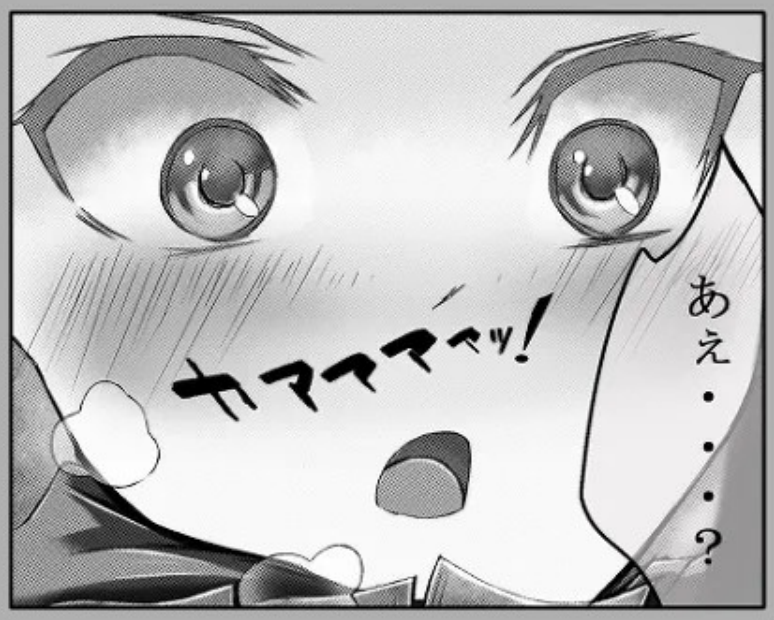
一時の間、静寂に包まれた山奥に二つの刃が交わる
金切る音が鳴り響いた。
そして、最後の一太刀が振り下ろされる・・・

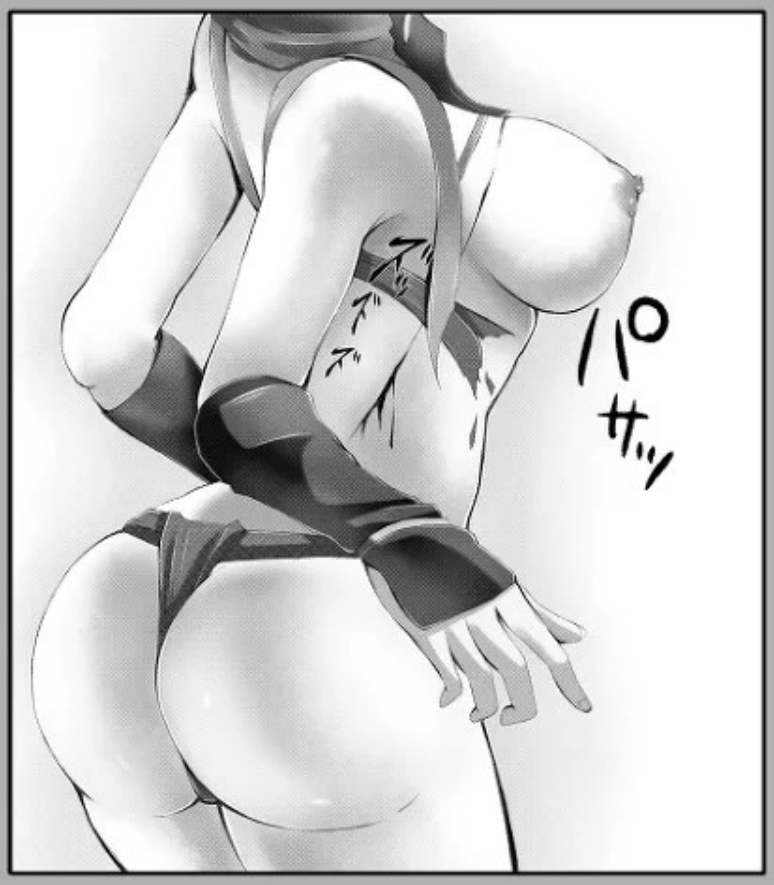
さすが、ナンバー2。女でも容赦のない噂はあながち間違いではなさそうですわね。
…は手加減させていただいたのですが…。
長引く戦いとなると私に分がありませんわね。
ズッ
では、この次の攻撃で
終わりにさせてあげますわ。これは刀ほどではありませんが、人を殺めるぐらい容易い代物ですわ。そして、本気を出した私の速さはもう貴方様の目でも追いつかぬもの。避けることも防ぎきることも出来ないでしょうね。
クスッ。最初は目がいいでしょうか。見えなくなった敵を相手に、うろたえる貴方様を眺めるのも一興ですわね。或いは…。

悪いが、貴様のような雑魚に次は・・・・

ない！

チン・・・・


ヤマママッ!
あぇ・・・?


パサッ

ズリュッ

――ひっ!?
な、なにが起こって・・・・
わたしの身体・・・・
わたしの身体が・・・・

格下の貴様が手を抜く余裕などない。
己の馬鹿さ加減を恨むんだな。
そして、貴様に残された僅かな時間を、
死の恐怖に駆られながら過ごけ、腐れ下郎。

い、いやっ！
おねがい！
助けてっ！助けて！
死にたくない！
死にたく――

ヒィィィ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

あぎいいいいいっ！

女忍者の醜い悲鳴を最後に再び静寂を取り戻してから一時、
二人の浪人風の男が女忍者であったものに歩み寄り、そして――

へっ、へへ。まったくよぉ。
自信ありげに単身で挑んで
こんなことになっち
まってるとはな・・・

ドッ

ドッ

ドッ

ドッ

ドッ

――うっ、うぉ！
三日振りのものが溢れ
出しやがる！

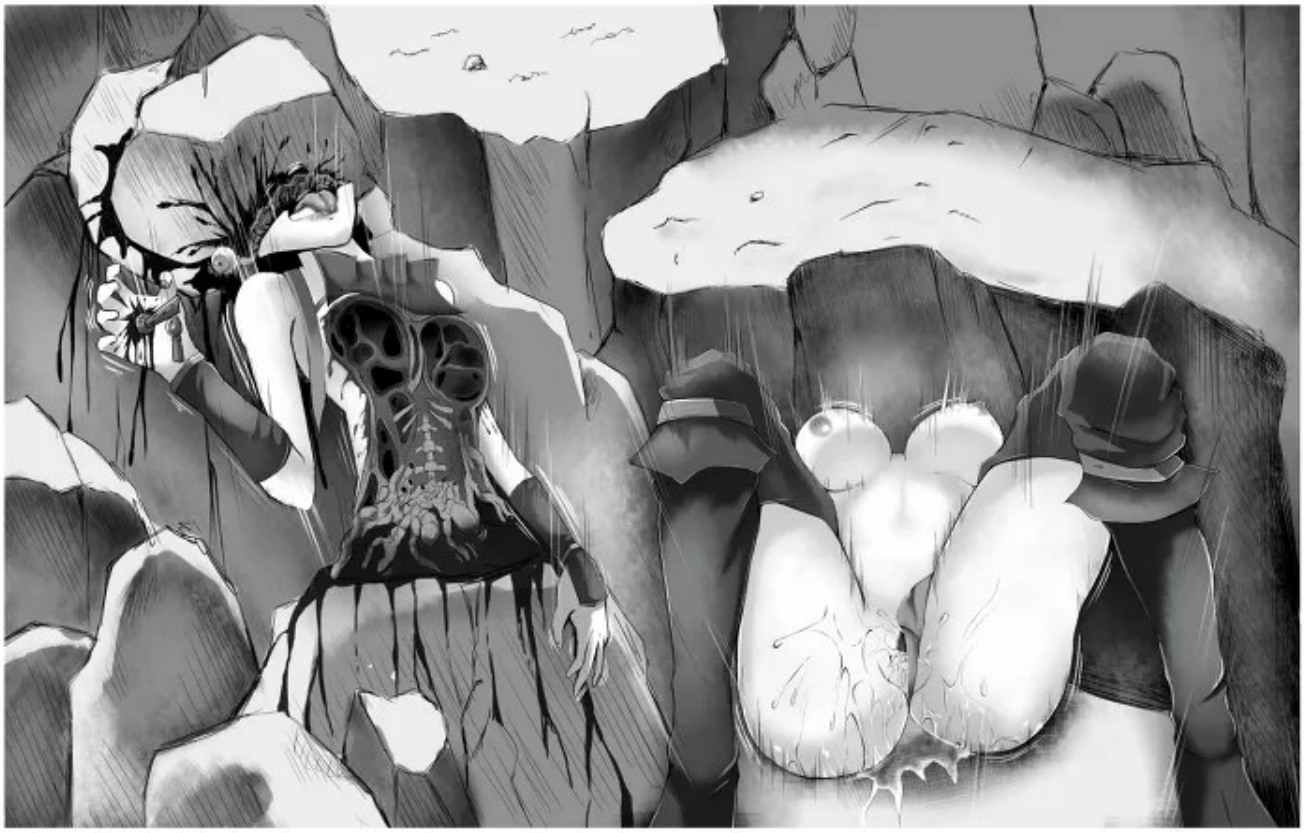
はっははははっ！
噂通りのエロいケツしてやがる！
思わず顔を埋めたくなる感触だぜっ。

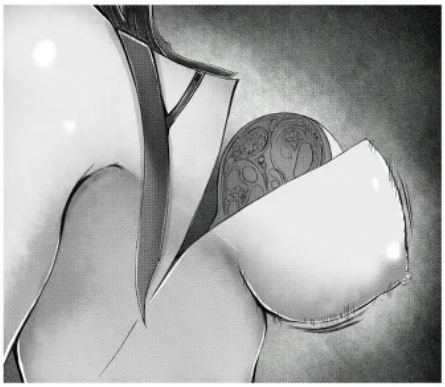
たかがくノ一の分際でよぉっ。
散々目の前で艶めかしく、締まった
身体をひけらかしておいて、こんな
肉塊になっちまったんじゃ
ザマァねえぜ。

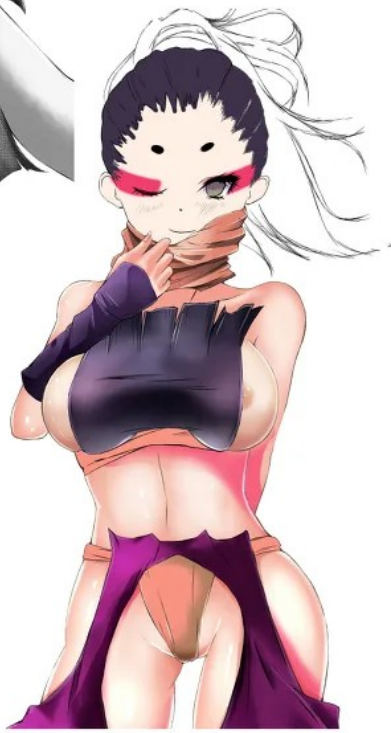
気がおかしくなるぐらいにこのまま犯し尽くしたいが、
こいつでフィニッシュだ！！
たっぷりと受け取りなっ！

そんでもって、あの世で立派な俺の息子を
孕んでくれよ！へへへへっ！

ふう・・・俺達を出し抜いてまでナンバー2に挑んだものののあっさりと返り討ちとはな。
忍びのくせして情けねぇ最期だぜ。
しかし、女相手と言え容赦ねぇ殺され方だな。
顔はもはや判別が不可能だ。
だが、これで自分の身体を恥ずかしげもなく晒すことが出来てんだから、ある意味本望だろうよ。
しかし、生きてる内にこいつの生意気な口でフェラを堪能したかったが・・・
っと、それより、さっさと二番のハチマキを追うぞ。
うかうかしてたら他の奴らに手柄をとられちまう。
こいつには悪いが、このまま放置して行くぞ。
運が良ければ誰かに埋葬されるか、或いは血の臭いを嗅ぎつけた獣共に噛み裂かれるか・・・せいぜいあの世から祈ってるんだな。
へへへへへ。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュッ
ビュッ

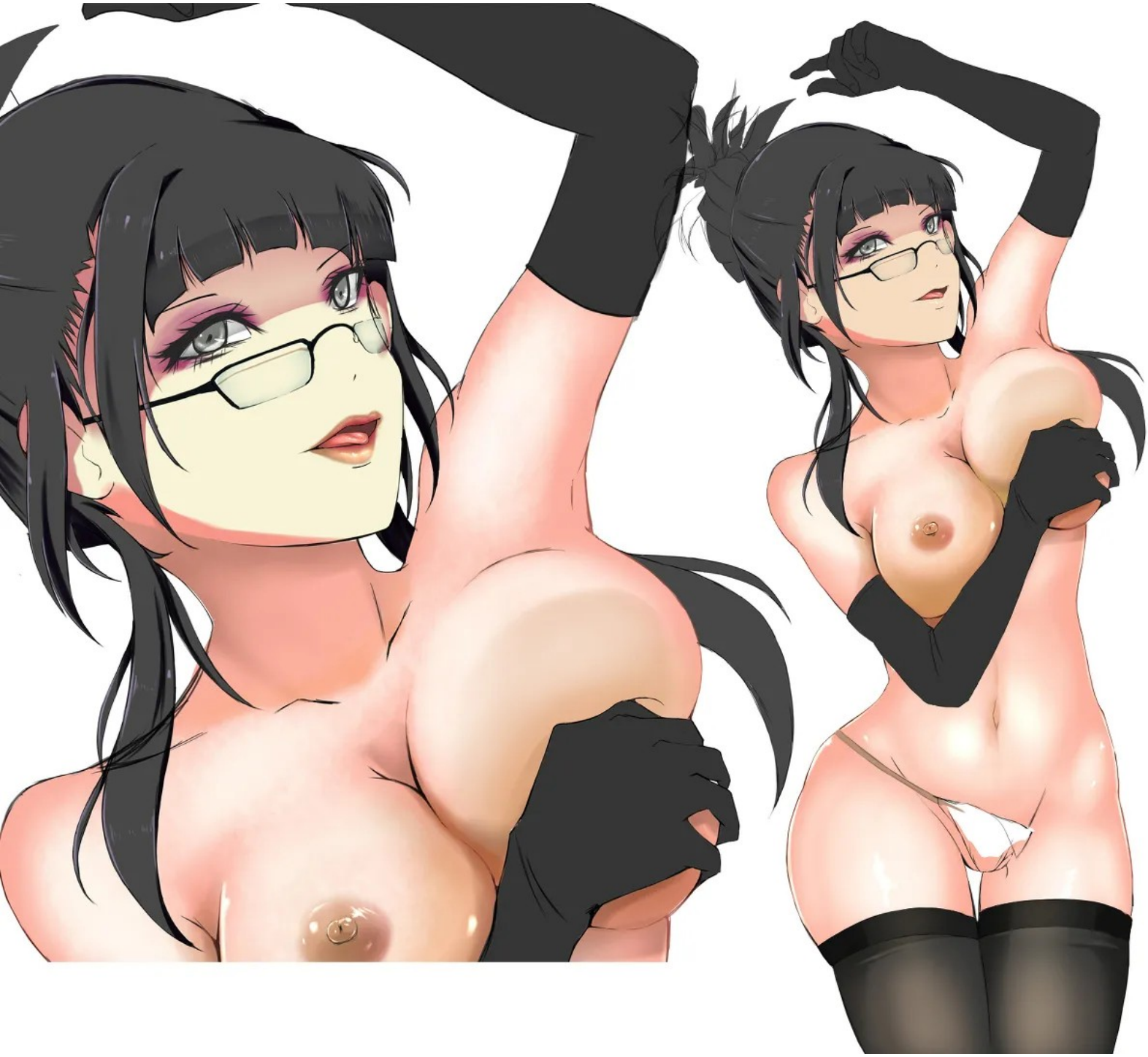






あ・・・うぅ・・・
ゆ、許さない。にんげんのぶんざいで・・・よくも・・・よくもっ
ふぅ。貴重な捕虜として四剣士共が連れてきたが、こいつはそこいらの女より良いぜ。生かされている間はたっぷり可愛がってやるからな。
ドピュッ
ドピュッ
ビクッ
ビクッ

何もかも奪ったお前らなんか
消えてなくなれっ!!
きやあああああ
ああああああっ!!



ふふっ、昨夜の男の子は
素敵だったわぁ♪

首を刎ねた瞬間ににドピュドピュってたくさん
お姉さんの中に出した感触が忘れられないわぁ♥

今夜もまた、ふふっ。

ふん ふふん ふん♪
らん らら〜 らんらら〜〜♪
――あら？

ざ〜んね〜ん。
アフロサムライだと思って
待ってたんだけど、違うお客人
のようね・・・

待ちくたびれた上に、
期待して損しちゃったわ。

どこの誰かは知らないけど、
ここに足を踏み入れたから
には生かしては帰せない
決まりなの

せっかくのイイ男だけど
残念だわぁ。

ポールキャット

（Polecat）

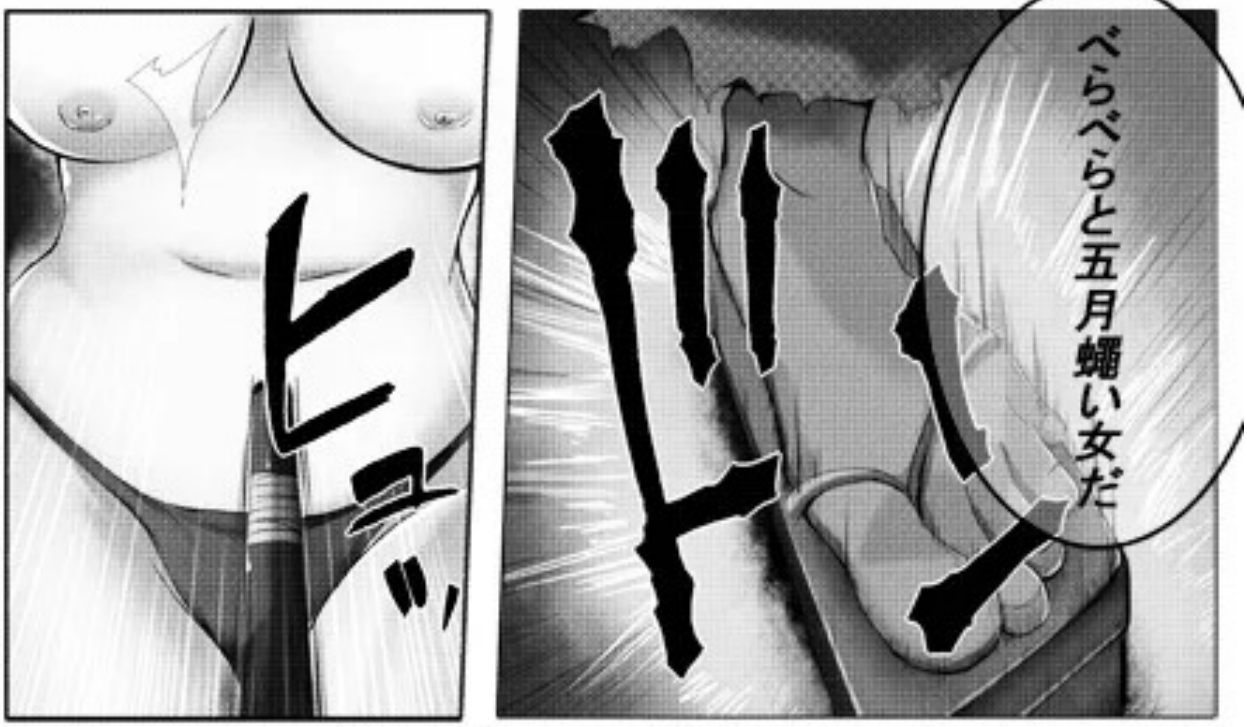
悪徳大名の下にいた女集団。
他の者はアフロサムライによって
倒されたが、一人生き延びた彼女は
ある小さな町を支配下に置き、
屈強な浪人達を集め、復讐の機会を
待っていた。
十代半ばにも関わらず一際目立つ
大きな胸を持つ。
そのため数多くの兵が集まった。
残虐非道な性格で歯向かう者には
容赦なく、また、町の子供を連れ去って
は自分の快楽のおもちゃにする。
そのため、彼女への恨みを持つ者は
少なくはないが、治安というものが
存在しないそこでは、町の人間は
抵抗出来ずにいる。
フェラを得意とし、彼女に殺された
男たちは皆死ぬ寸前に天国を感じる
と言われている。

——で・も♥

退屈凌ぎにはなりそうね！

たっぷり楽しみながら殺してあげるわ！

あはははははは！！


べらべらと五月蠅い女だ
ドン
ヒュッ

うづっお
ゲルッ
ズドッ

がはっ！

むぐっ!?

ずんっ…

フェラが大好きなんだろ？
ちゃんとご奉仕しないとなっ！

ごぷっっごぽっ！
おごぉぉぉぉっっ!!!

う…ぶっ

う…あ
ぬぬ

どんな気分だ？口の中で
めちゃくちゃに混ぜられた
感想は？
ドロォ…
あぁ…
ビリッ
ビリッ
ブッ

ヴェ…
げえええええっ
なんだ、吐いちまったか
んまぁ、そろそろ
終わりにして…
ビシャ

――ゆ、ゆるさない

今まで歯向かってきた男共は苦しまずに快感を味合わせて逝かせてあげてたわ。

でも、私にこんな屈辱を与えたお前だけは・・・お前だけは絶対っ！

ただ殺すだけじゃなく、生きたままバラバラに斬り刻んで晒し物にしてやるよ！

まだお仕置きが必要そうな嬢ちゃんだな。

まったく。よく喋る上に、よく動く身体だ。

特にデカ乳が

だが、動きが遅い！

っ!?

ドチャ

ズ…

ヒッ!?
ヒイイイイイ

う、うでえっ!
私の腕がっ!

ビュッ

いやあああああああ
あっ！！

まったく
乳もケツもエロそうに
しやがってよぉっ！

ヒギッ！

や・・・めっ。
たすけ・・・て！

おいおい、今更命乞い
とはねぇ・・・

悪いが、無理な話だ。
個人的な恨みはないが
こちとら仕事なんでね。

あんた、町の人間から恨みを買いすぎだ。
今回の依頼主は一人や二人じゃねぇ。
多くの人間があんたの死を望んでいる。
あん
あん
お、お願い。たすけてっ。
見逃してくれたら何でもしてあげるっ！
あなたが望むなら私の身体なんて
いくらでも！
ほぉ・・・・
はぁ
はぁ
はうッ
そいつは嬉しいお誘いだが
腕を失ったあんたの身体は御覧の通り、
やりたい放題だ。
それに、
あんたはもう終わりだ

レ・ぎ!!
な、なに？
か、身体が・・・私の身体が
何かおかしいよぉ

や、やめてぇぇっ！
揺れ動かされる度に
気持ち悪くなってー
ああぁぁぁぁぁっ！
こ、壊れるっ！
私が壊れるぅぅっ！

安心しな、これで
イかせてしてやるよ！
いっ、いやあぁぁぁぁ！
今出したら、私の身体がっ
身体がぁぁぁぁ！！

ダメッ！ダメッ！
ああああっ
う、うそ、気持ちっ――
気持ちいイイイいいいい！
こんな・・・こんなの初めて♡
んあッ♡
はあん♡
せーえきがどんどん私の
せーえきがどんどん私の
腟内（なか）に、溜まれて――♡
オルルルッ
ビクビクッ

絶命奥義　～屍遊び～
快感を与え続けた後、既に斬られた肉体は徐々に崩壊。更には精神さえも破壊し、極楽と地獄を味わいながら逝く。
腕を斬り落とした時にはもう既にてめぇはこの技を受けて動く死体も同然だったのさ。

そして――

残虐非道な技故、禁じられた技だが、子供さえも手に掛けるあんたのような下衆にはちょうどいい技だ。あの世でこれまでの非道を悔いな。

ドガ

ドガ

ドガ

「ちょうど終わったようね」
駆け付けた始末屋仲間の女が男へ駆け寄ってくる。
「そっちは？」
「雇われの浪人とは言ってもほとんどが素人同然の腕前。おまけに女相手だと思って全員ナメてかかってきたからバラしてやったわ」
男は半笑いを浮かべ、再び女の亡骸に目をやった。
「まあ、しかし、だ。悪行を重ねてきたとはいえ勿体ねぇことをしちまったな」
「死んで当然じゃない、こんな女」
女は口を尖らせた。
「道を踏み外さなければ、毎晩お願いしたいぐらいの身体の娘だったぜ。しかも噂じゃ、名のあるところの娘だって話だ。まっ、単なる噂に過ぎねえが・・・」
「ふぅ～～ん」
女はしばし亡骸を見つめた後、何かを思いついたのかうすら笑みを浮かべ
男の顔を覗く。
「ねえ、この女になってあげようか？」
「はぁっ！？」
「私がこいつを着るの。そうすればこの女の身体をやり放題じゃん。中出しされるのだけは勘弁だけど」
「ばっ、ばかなこと言ってねぇで捕まってるガキ供を連れてさっさと帰えるぞ。いつまでもこんなとこで油を売ってられねぇ」
男はあきれ顔交じりに足早にその場を去った。
「まったく、冗談だってのに・・・」
女は笑みを浮かべる、が、すぐに未だビクついた女の亡骸に視線をやった。
「醜い最期だこと・・・でも、一度あんたのような良い身体を着てみたいのよねぇ。あんたのお尻、唇、胸・・・そう、お前の身体ならあいつを私のモノに出来そうなの。だから・・・」
女は狂気にも似た笑みを浮かべると、そっと亡骸の大きな乳房を触りだした。
「なんて柔らかくて、綺麗な肌。それにとても大きく。こんな肌に他の不要なモノは必要ないわよねっ！」
女はまるで獣の如く、飛び出した臓物・肌に張り付く女の肉、そして骨をも抉り出していく。
「中身は後でちゃんと肥料や家畜の餌にでもしてあげるわ。そして地獄から魂の抜けた身体の行く末を見守り続けてるといいわ。ふふふっ」